

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第234集

枇杷坂遺跡群
直路遺跡V

長野県佐久市長土呂直路遺跡V発掘調査報告書

2015.03

佐久市教育委員会

例　言

- 1.本書は、有限会社田園不動産が行う宅地造成に伴う枇杷坂遺跡群直路遺跡Vの発掘調査報告書である。
- 2.調査原因者 有限会社 田園不動産
3.調査主体者 佐久市教育委員会
4.遺跡名および所在地 枇杷坂遺跡群 直路遺跡V(NSJ V)
佐久市長土呂字直路301-1他
- 5.調査期間及び面積 平成26年12月1日～12月10日(現場作業)
平成26年12月11日～平成27年3月20日 (報告書作成作業)
220m²
- 6.調査担当者 富沢 一明
7.本書の編集・執筆は富沢が行った。
8.本書及び出土遺物は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

凡　例

- 1.遺構の略記号は、住居址(H)・土坑(D)・溝(M)である。
2.挿図の縮尺については、挿図中にスケールを示した。
3.遺構の標高は遺構ごとに統一し、水系標高を「標高」とした。
4.土層の色調は、1988年版『新版 標準土色帖』に基づいた。
5.調査区グリッドの間隔は4×4mに設定した。
6.挿図中のスクリーントーンは以下のことを示す。



調査状況(南より)

目　次

- 例言・凡例・目次
第Ⅰ章 発掘調査の経緯
1.経過と立地
2.調査体制
3.調査日誌
4.遺構・遺物の概要
5.標準土層
6.調査の方法
第Ⅱ章 遺構と遺物
1.堅穴住居址
2.土　坑
3.溝状遺構
4.調査の成果
写真図版
遺物観察表
抄　録



第1図 直路遺跡V位置図(1:50000)

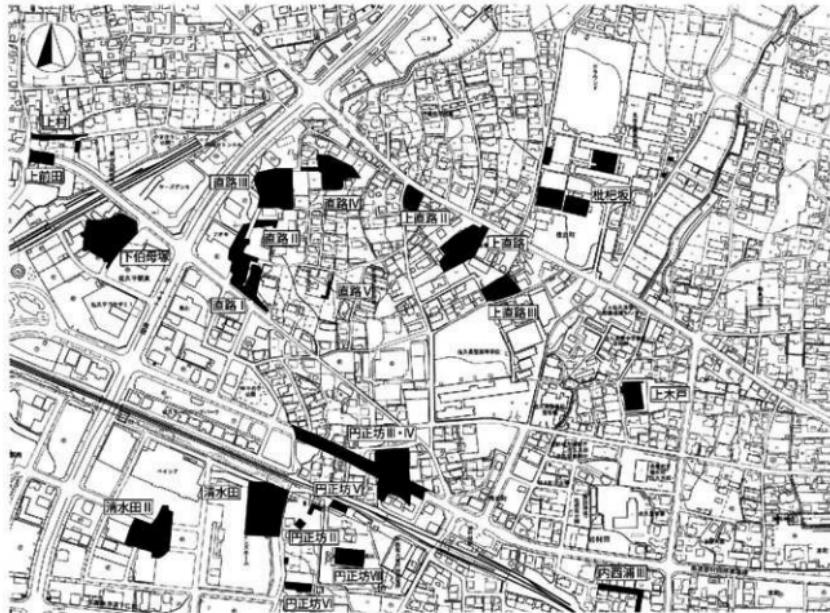
第Ⅰ章 発掘調査の経緯

1. 経過と立地

直路遺跡Ⅴは、佐久市の長土呂地籍に所在し、枇杷坂遺跡群の中ほどに位置する。遺跡は、佐久平北部にみられる「田切り地形」の台地上に立地し、台地周辺の海拔は710m前後を測る。

本遺跡の周辺では、数多くの遺跡が調査されている。東200mには上直路遺跡が調査されている。弥生時代後期の住居址2軒が調査され、内1軒からは住居内埋葬という形で土壙墓が検出された。土壙墓からは欠損もあり正確な点数は不明であるが、右腕に5本、左腕に10本の銅釧を装着した人骨が出土し、尚且つ、住居は焼失した状態であった。これら特異な埋葬形態と共に多量の銅釧の出土は非常に注目される遺跡となっている。この他の遺跡としては銅鏃が出土した下伯母塚遺跡、ト骨や円形周溝墓と方形周溝墓が混在して発見された円正坊遺跡等がある。また、直路遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳの各遺跡でも弥生時代後期の住居址が調査され、特に直路遺跡Ⅰにおいては弥生中期から後期への過渡的な様相を示す土器群が一括出土している。この土器群は所謂、中期栗林式から後期箱清水式への土器変遷過程を示すと考えられている。このように、当遺跡周辺では弥生時代後期の住居址が発見されており、幅400mの台地上には当該期の集落址が大規模に展開していることが推定されている。

今回、遺跡群内で、有限会社田園不動産により宅地造成の計画がなされ佐久市教育委員会に文化財保護法93条の届出がなされた。当教育委員会では対象地の試掘調査を行い遺構が発見された為、保護協議を行い、道路部分の発掘調査を行うこととなった。なお、宅地面は盛り土による工事であることから、今回の開発では調査対象外となった。



第2図 周辺遺跡位置図(1:10000)

2. 調査体制

調査受託者	佐久市教育委員会	教育長	棚澤晴樹
事務局	社会教育部長	山浦俊彦	
	文化財課長	三石宗一	
	文化財調査係長	比田井清美	
	文化財調査係	小林眞寿 富沢一明 上原 学 神津一明 久保浩一郎	
	嘱託職員	林 幸彦	

調査担当	富沢一明	浅沼勝男	飯森成英	岩松茂年	木内修一	羽毛田利明
調査員	赤羽根篤	横尾敏雄	渡辺 学	小林妙子	橋詰勝子	橋詰信子
	土屋邦子					加藤ひろ美

3. 調査日誌

- 平成26年11月 3日 有限会社田園不動産より土木工事等のための埋蔵文化財発掘の届出
13日 長野県教育委員会へ市教育委員会より26佐教文財第262-2号土木工事等のための埋蔵文化財発掘の通知について(副本)
14日 長野県教育委員会より26教文第7-830号にて周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について(通知)
21日 市教育委員会により試掘調査
25日 有限会社田園不動産より埋蔵文化財発掘調査の概算調査費の見積について依頼。同日、見積もり回答
28日 有限会社田園不動産と市教育委員会により埋蔵文化財発掘調査委託契約を締結
12月1~10日 発掘調査を行う。
11日 埋蔵文化財の発見届
26日 文化財認定

4. 遺構・遺物の概要

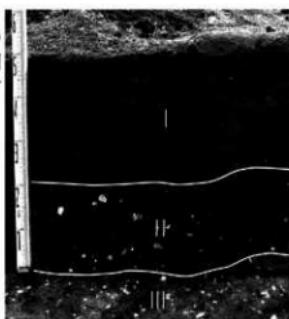
遺構 穴住居址 8軒(弥生後期) 土坑2基 溝状遺構1本
遺物 弥生土器(壺・甌・高杯・鉢) 土製品(紡錘車・土製円板) 石製品(磨石・窓石・石鐵)

5. 標準土層

今回の調査地点は南西側に傾斜する地形で、調査区の北端と南端では50mで比高差2mを測る。また、調査範囲は、地形が急激に西側に傾斜し始める部分であり、後述するⅡ層の堆積層が厚みを増していく部分にある。

基本層序は3層に分かれ、Ⅲ層上面が遺構確認面である。確認面深さは地表より50cmほどであった。

第Ⅰ層 10YR5/1 褐灰色土 耕作土、しまり弱い。
第Ⅱ層 10YR2/1 黒色土 軽石粒を多く含む。
第Ⅲ層 10YR6/8 明黄褐色土 P1層で上部に漸移層あり。



6. 調査の方法

遺構調査

住居址は均等に4分割し、対面する2区画を掘り下げ土層の観察・記録を行った後完掘し、床面を精查し、柱穴・炉・カマド等を適宜分割し、土層の観察・記録を行い、最終的に平面の記録を行った。遺物は分割した各区毎に取り上げ、床面上の遺物に関しては連続する No を付け3次元の記録を行い取り上げた。土坑は長軸方向に沿って2分割し、半裁により土層の観察・記録を行った後完掘した。遺物は遺構Noで一括した。溝は短辺方向に任意の場所で区分し、土層を観察・記録した。遺物は区毎に取り上げた。遺構外の遺物はグリット毎に取り上げた。

遺構測量

平面図・断面図ともに調査区内に設定した基準杭を利用した造り方測量により調査担当及び調査員が実施し、縮尺は1/20を基本とした。

写真

現場での写真は、デジタル一眼レフカメラによるRAW画質モードと、35mm一眼レフカメラによるカラーリバーサルで同一カットを各々記録した。遺物写真はデジタル一眼レフカメラで撮影し、EPSデータ形式で報告書に使用した。

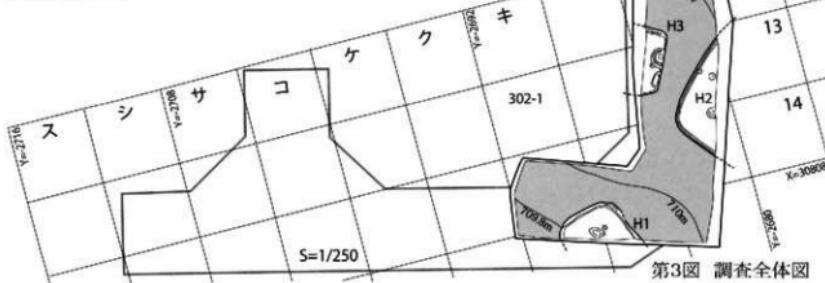
遺構・遺物の整理等

遺物洗浄は竹ブラシを用い手で行い、室内で自然乾燥させた。注記は白色のポスタークーラーにより行い、薄めたラッカーアクリルをその上から塗布した。遺物の接合はセメダインCを使用し、遺物復元の際の充当材はエボキシ系樹脂を用いた。遺物実測は手取りで行った。遺物の保管に際しては報告書を台帳として、報告書掲載遺物と未掲載遺物に区分し、コンテナに分類ラベルを貼り収蔵庫に収納した。

図面は遺構を1/40で修正、遺物を1/1で実測し、それぞれ仮図版を作成した。

報告書

文章と挿図はアドビ社製の「イラストレーター」で作成し、表についてはマイクロソフト社の「エクセル」で作成した。写真・拓本はアドビ社製「フォトショップ」により補正加工を行った。これらを最終的に「イラストレーター」により頁単位で編集し、印刷原稿とした。



第3図 調査全体図

第II章 遺構と遺物

1. 堪穴住居址

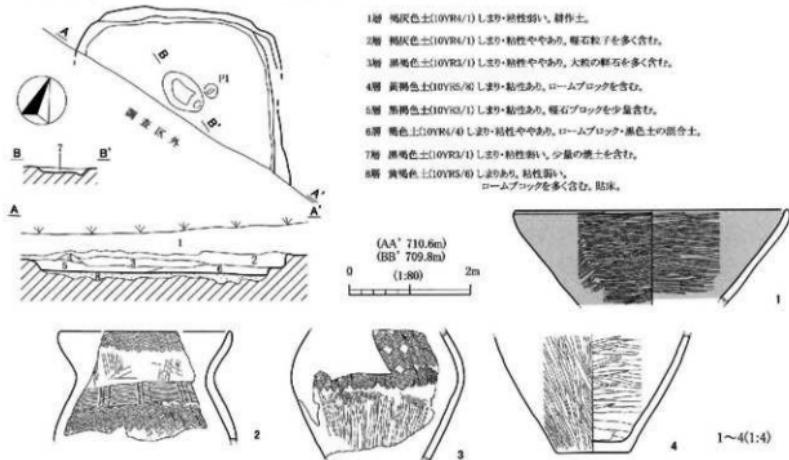
(1) H1号住居址

本址は調査区南端で検出された。形態は方形と考えられるが南側が調査区外となり不明である。規模は、長軸が検出長2.76m・短軸が東西で2.84mである。床面積は検出部分で3.92m²を測る。壁深さは東側で最大0.15mを測る。住居主軸方位はN-21°-Wを示す。床は全体に軟質で、全体に貼り床が施されていた。

炉は住居址北壁より検出された。形態は楕円形で、規模は長径0.8m・短径0.52m・深さ0.14mを測る。覆土中に少量の焼土が確認された。また、本址からはピットが1か所検出された。規模は径0.24m・深さ0.14mを測る。

本址からの出土遺物は少量であったが、覆土から出土した遺物を中心にして4点を図示した。1は赤彩が施された高壙の坏部である。2～4は甕であり、2は口縁部から胴部の破片である。口縁部直下に無文帶を持ち、口唇部が僅かに内湾することを特徴とする。3は胴部の破片で、櫛描波状文が施されている。4は胴部から底部の破片である。

本址からの出土遺物は少なく不確実な要素もあるが、2の甕は箱清水式の中でも古相を示す資料であり、このことから、本址は弥生後期前半に位置づけられると考える。

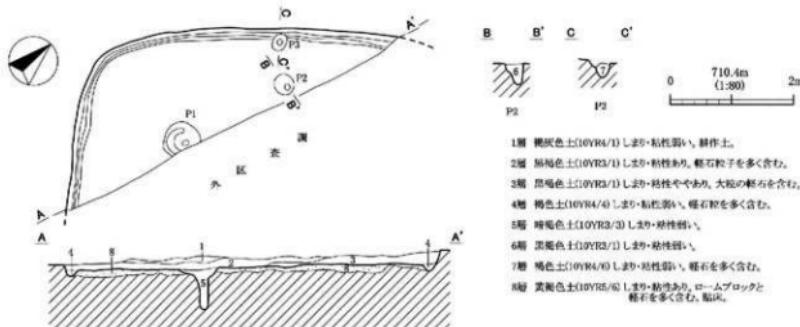


第4図 H1号住居址及び出土遺物実測図

(2) H2号住居址

本址は調査区南端のエ・オ-13, オ-14Grで検出された。形態は方形と考えられるが東側が調査区外となり不明である。規模は、長軸が検出長5.12m・短軸が東西で2.80mである。床面積は検出部分で7.17m²を測る。壁深さは北側で最大0.08mを測る。住居主軸方位は推定でN-45°-Wを示す。床は全体に硬質で、全体に貼り床が施されていた。検出された壁部分には壁溝が巡っており、深さ0.08mを測る。ピットは3か所で検出された。P1は検出位置より主柱穴の一つと考えられる。各ピットの規模はP1が径0.6m・深さ0.7m、P2が径0.36m・深さ0.6m、P3が径0.32m・深さ0.23mを測る。

本址からの出土遺物は少量で図示できるものは無かったが、箱清水式と考えられる壺・甕片が覆土より出土しており、これらから本址は弥生後期の所産と考えられる。

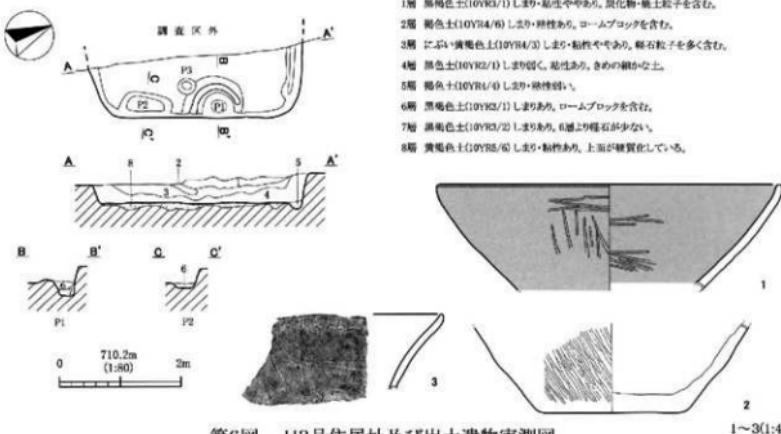


第5図 H2号住居址実測図

(3) H3号住居址

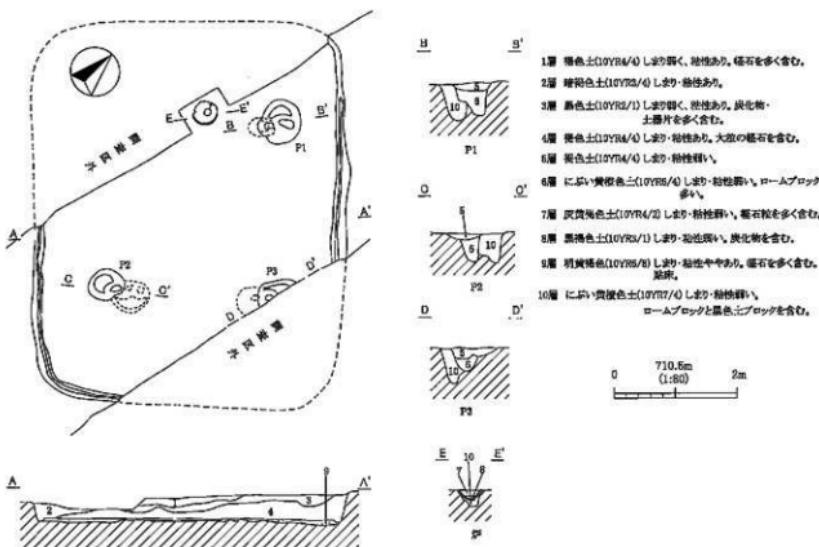
本址は調査区南端のオ-12・13,カ-13Grで検出された。形態は東西方向に長軸を持つ長方形と考えられるが、西側の大部分が調査区外となるため詳細は不明である。規模は、長軸が検出長0.96m・短軸が南北で3.08mである。床面積は検出部分で2.96m²を測る。壁深さは南側で最大0.28mを測る。住居主軸方位は推定でN-68°-Wを示す。床は全体に硬質で、貼床が施されていた。北壁部分には壁溝が巡っており、深さ0.07mを測る。ピットは3か所で検出された。P1は検出位置より貯蔵穴と考えられる。特にピットの周囲には堤状の高まりが作られていた。規模はP1が径0.88m・深さ0.32m、P2が径0.88m・深さ0.11m、P3が径0.32m・深さ0.23mを測る。

本址からの出土遺物は少量であったが3点を図示した。1は赤彩された高杯の壊部である。2は壺の底部と考えられる。3は甕の口縁部破片である。口唇部は櫛描波状文が施され、僅かに内湾する。これらの事から、本址もH1号住居址と同じく、弥生後期前半に位置づけられると考える。



第6図 H3号住居址及び出土遺物実測図

(4) H4号住居址

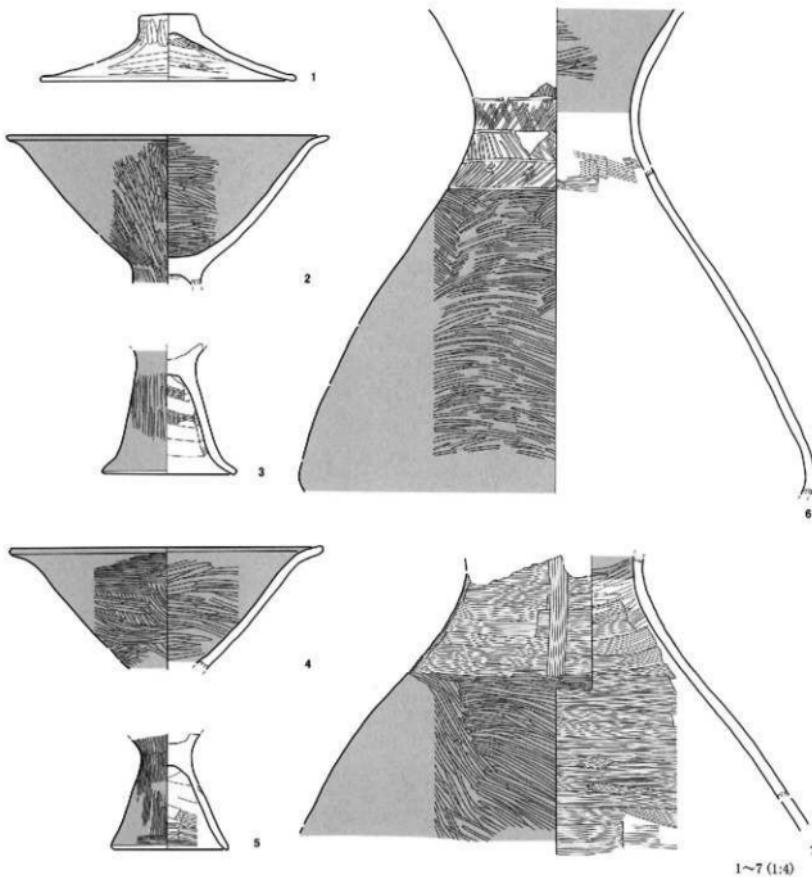


第7図 H4号住居址実測図

本址は調査区中央のオ・エ-9・10・11・13Grで検出された。H7号住居址と重複関係にあり、本址が新しい。形態は東西方向に長軸を持つ長方形と考えられる。規模は、長軸が推定長6.00m、短軸が4.64m、面積が検出部分で13.0m²、推定で27.84m²を測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、深さは北側で最大0.52mを測る。住居主軸方位はN-45°-Wを示す。床は全体に硬質で貼床が施されていた。検出された壁の部分には壁溝が巡っており、深さ0.02~0.06mを測る。ピットは3か所で検出された。これらピットはいずれも検出位置から柱穴と考えられる。規模はP1が径0.72m・深さ0.49m、P2が径0.56m・深さ0.53m、P3が径0.72m・深さ0.37mを測る。また、本址ピットは住居内側に点線で示した掘方検出時のピットが存在する。掘方ゴットの位置関係はいずれも住居址内側に存在する為、拡張前のピット位置と考えることができる。規模はP1が径0.44m・深さ0.57m、P2が径0.74m・深さ0.53m、P3が径0.66m・深さ0.48mを測る。

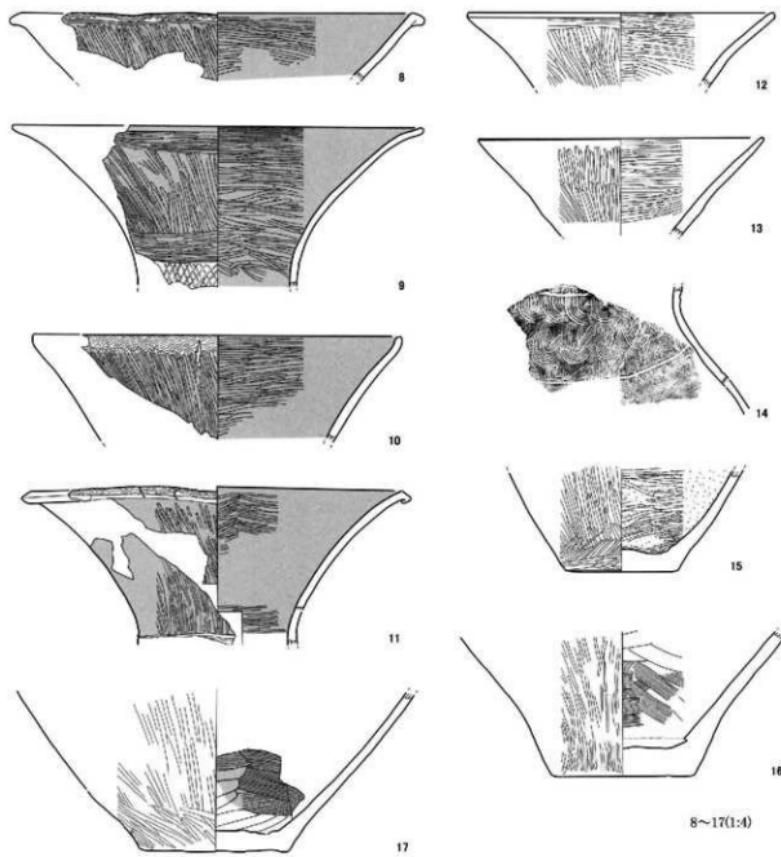
炉は西壁より検出された。形態は円形で第8図-7の壺が口縁部側を下にして炉体として使用されていた。所謂「土器敷き炉」である。規模は径0.42m・深さ0.25mを測る。頗る焼土は検出されなかつたが、炭化物が多く覆土中から検出された。

本址からの出土遺物は多量であった。遺物は特に甕土3層から集中的に出土しており、炭化物と共に住居北側より住居内に廃棄されたような出土状態であった。これに土器片は接合作業を経ても検出された範囲のものについては完形に復元できるものは無かった。図示したものは32点である。このうち6と7以外はこの3層中からの出土である。1は無形の蓋である。通常の着清水式蓋と異なり、粘土ひねり出しのようなつまみ部がつくられておらず、土器底面のような作り方をしている。2~5は高壺の壺部及び脚部の破片である。いずれも赤彩が施されている。6は壺の頭部から胴部の破片であり、炉周辺の床面より破碎した状態で出土した。頭部には三段の箇描斜走文が施され、胴部外面は赤彩が施されている。また、胴部ぐいれ部はきれいに直線的に割れており、意図的な破碎の可能性も指摘できる。



第8図 H4号住居址出土遺物実測図(1)

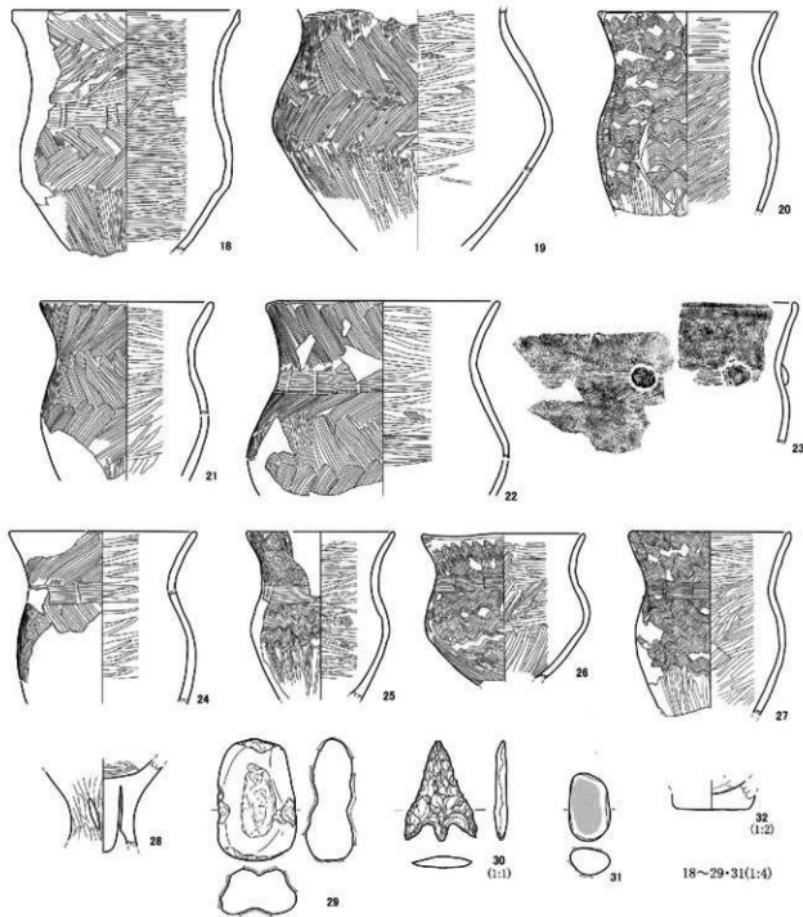
7は炉に埋設されていた壺である。頸部側と胴部側は意図的に打ち欠いた状態であった。頸部の文様帶は櫛描横線文を7段以上描き、縦方向に一組の櫛描文を4か所に施している。8は当初に壺の口縁部と捉えたが、口唇部の傾きから高环坏部の破片と考えられる。内外面に赤彩が施されている。9は壺の口縁部から頸部の破片である。内外面に赤彩が施され、頸部には2方向の櫛描斜線文により「格子目」状の模様としている。10は同じく壺口縁部の破片である。口唇部に櫛描波状文を施す。11は壺の口縁部から頸部の破片である。赤彩が施されている。8と同じく口唇部が面取りのため粘土を貼り付けて厚くなっており、面の部分には櫛描波状文が施されている。12と13は壺の口縁部と考えられるが、いずれも無彩である。



第9図 H4号住居址出土遺物実測図(2)

14は壺頸部の破片である。櫛を使った「U」字状の文様を鱗状に施しているのが特徴である。このような文様はあまり箱清水式の中には見られず、外來の影響も考えられる。15～17は壺の胴部下半から底部の破片である。いずれも外面は丁寧なミガキが施されている。15は内面に所謂「黒彩」と考えられる状態が観察できる。17は内面に一部赤彩のような痕跡が観察できる。18～28は甕である。特に26は形態から台付甕と考えられ、28は台付甕の脚部と体部の接合位置と考えられる。甕の文様は大きく2種類に分かれ、18・19・21・22・24の櫛描斜走文を羽状構成するタイプと20・23・25～27の櫛描波状文を施すタイプである。いずれのタイプも頸部に櫛描簾状文を施すタイプと施文しないタイプが存在する。なお、23は頸部に刺突を伴なう円形貼付文が施され、口縁部も口唇部分が僅かに内湾する形態で、他の甕とは形態が異なる。

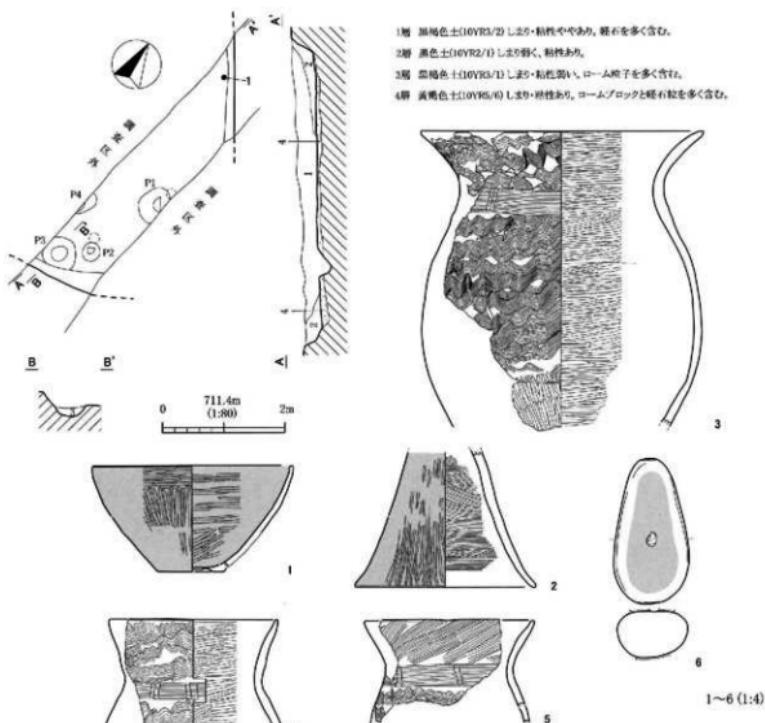
29～31は石製品である。29は研石であり、両面にいくつかの窪み部分が明瞭に観察できる。30は石鏃で



第10図 H4号住居址出土遺物実測図(3)

有茎のタイプである。ほぼ完形である。31は磨石で、3面の磨りが確認できる。32はミニチュア土器の底部と考えられるが、器種等は不明である。

以上、本址からの出土遺物は非常に豊富であるが、先述したようにそのほとんどが流れ込みか投げ込みによる遺物がほとんどで、本址に確実に伴うものとしては6と7のみと考えられる。このことから不確実要素もあるが、本址の所産時期は弥生後期後半と考えられる。



第11図 H5号住居址及び出土遺物実測図

(5) H5号住居址

本址は調査区北側のウ-4・5Grで検出された。形態は南北方向に長軸を持つ長方形と考えられるが、調査面積が僅かであるため不明である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、深さは北側で最大0.35mを測る。床は全体に軟質で貼床が施されていた。ピットは4か所で検出された。規模はP1が径0.54m・深さ0.38m、P2が径0.30m、P3が径0.58m・深さ0.18m、P4が径0.46m・深さ0.48mを測る。また、P1とP2はいずれも南北方向にピットがズレを起こしていた。

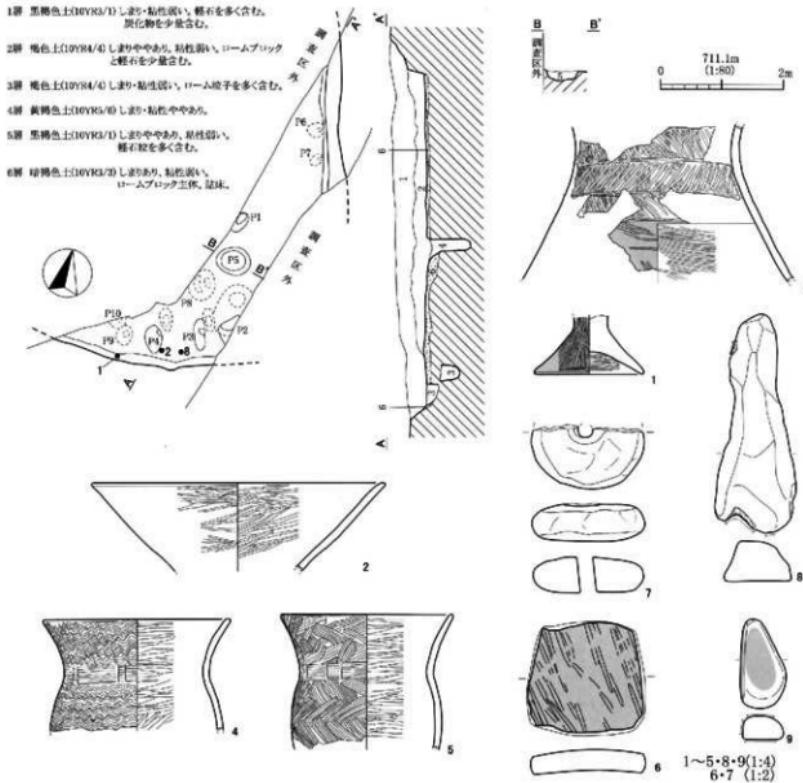
本址からの出土遺物は少量であったが、6点を図示した。1は赤彩された鉢である。住居址の東壁直下から出土した。2は高杯の脚の部分である。外面に赤彩が施されている。3～5は甕の破片である。3と4は口縁部と胴部に櫛描波状文、頸部に櫛描簾状文が施されている。5は口縁部が櫛描斜走文、胴部が櫛描波状文、頸部が櫛描簾状文が施されている。4と5の口唇部はやや内湾する。6は磨石で、一部に敲きの痕が残る。

本址からの遺物は少なく、所産時期は不確実であるが、4や5の遺物の特徴から弥生後期前半に位置づけたいと考える。

(6) H6号住居址

本址は調査区北端のウ-6・7、エ-7Grで検出された。形態は長方形と考えられるが住居の殆どが調査区外となり詳細は不明である。壁深さは北側で最大0.53mを測る。住居主軸方位は推定でN-14°-Wを示す。床は全体に軟質で、全体に貼床が施されていた。ピットは床面で5か所、掘方時に5か所が検出された。P3とP4は検出位置とその形態から入口施設のピットと考えられる。各ピットの規模はP1が径0.38m・深さ0.63m、P2が径0.50m・深さ0.23m、P3が径0.52m・深さ0.27m、P4が径0.46m・深さ0.28m、P5が径0.58m・深さ0.19m、P6が径0.26m・深さ0.21m、P7が径0.22m・深さ0.22m、P8が径0.54m・深さ0.27m、P9が径0.34m・深さ0.23m、P10が径0.26m・深さ0.15mを測る。これらピットもズレを起こしているものが多かつたが、P1は深さがあるがズレを起こしておらず、或いは本址に伴わない後世のピットの可能性がある。

本址からの出土遺物は検出部分が狭い割には比較的多く、9点を図示した。1は赤彩された小型高壙の脚部と考えられる。2と3は壺であり、2は無彩の口縁部である。3は頸部に輪描斜走文を3段以上施している。胴部は赤彩されている。4と5は壺であり、4は輪描波状文と頸部に輪描筆状文を施す。5は口縁部と胴



第12図 H6号住居址及び出土遺物実測図

部に櫛描斜走文を羽状構成で施し、頸部に櫛描簾状文を施す。7は土製筋錐車である。6は壺腹部破片を転用した土製土板であり、形態は方形である。8は敲石と考えられ、先端部に敲痕がある。9は磨り石で3面に磨り痕がある。

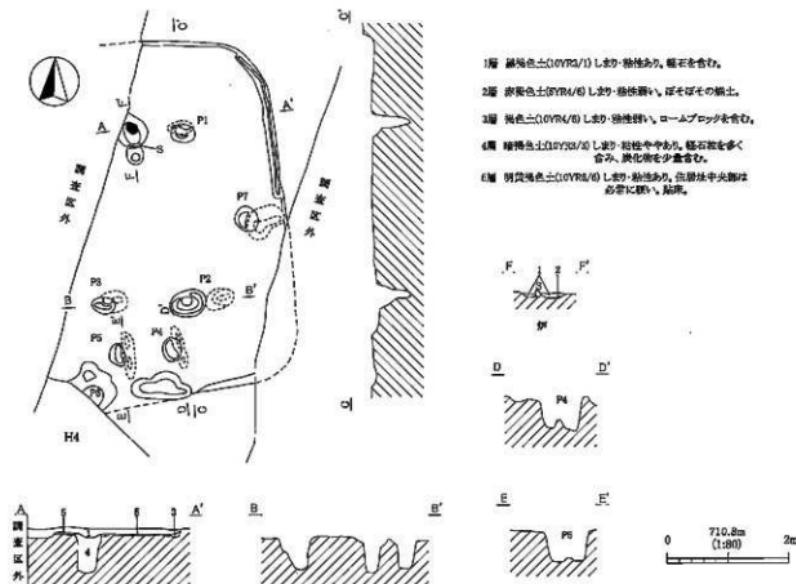
これらの遺物から、本址は弥生後期後半に位置づけられると考える。

(7) H7号住居址

本址は調査区中央のエ-8・9Grで検出された。重複関係はH4号住居址とあり、本址の方が古い。形態は南北方向に長軸を持つ長方形と考えられる。規模は、長軸が5.84mである。床面積は検出部分で17.75m²を測る。壁深さは北側で最大0.10mを測る。住居主軸方位はN-10°-Wを示す。床は全体に硬質で、貼床が施されていた。北東コーナーから東壁の一部には壁溝が巡っており、幅0.16m・深さ0.05mを測る。ビットは6か所で検出された。P1～P3が主柱穴、P4とP5が入口施設、P6は貯蔵穴と考えられる。ビットの規模は、規模はP1が径0.38m・深さ0.52m、P2が径0.62m・深さ0.46m、P3が径0.36m・深さ0.30m、P4が径0.40m・深さ0.35m、P5が径0.42m・深さ0.22m、P6が径0.84m・深さ0.28mを測る。なお、これらビットは先にも述べたが地盤のズレにより図に破線で示したとおり南西方向に上部が動いている。

炉は北壁より検出された、大小二つの凹形土坑が連結したような形態で、中央に比熱した礫が間仕切りのように配置されていた。所謂「石敷炉」の形態と考えられる。焼土は少量検出された。炉の規模は長径0.86m、短径0.50m、深さ0.08mを測る。

本址からの出土遺物は少量で図示できるものは無かったが、赤彩された弥生壺片や櫛描波状文を施した壺片等の出土から、周辺の住居址と同じ弥生後期の範疇で捉えられると考える。



第13図 H7号住居址実測図

(8) H8号住居址

本址は調査区中央のウ・ユ-7・8Grで検出された。H6・H7号住居址と重複関係にあり、本址の方が古い。

形態は南北方向に長軸を持つ長方形と考えられるが、調査面積が少なく不明である。床は全体に硬質で貼床が施されていた。壁高さは0.17mで、ほぼ垂直に立ち上がる。また、壁に沿うように掘方検出時に壁構造の突り込みが確認できた。幅0.28m・深さ0.04mを測る。ピットは1か所で検出された。規模は径0.70m・深さ0.43mを測る。

本址からの出土遺物は少量であり、図示できるものになかったが弥生壺・甕の破片があり、周辺の住居と同じく弥生後期の所産時期が考えられる。

2. 土坑

(1) D1号土坑

本址は調査区中央のエ・オ-11Gで検出された。形態は梢円形で、規模は長軸0.78m・短軸0.72m・深さ0.15mを測る。長軸方位はN-5°-Bを測る。底面はやや凹凸があった。本址からの出土遺物は無かった。

(2) D2号土坑

本址は調査区中央のオ-11Gで検出された。D1号土坑と東西に並ぶように検出された。形態は梢円形で、規模は長軸0.78m・短軸0.62m・深さ0.23mを測る。長軸方位はN-78°-Wを測る。底面は平坦であった。本址からの出土遺物は無かった。

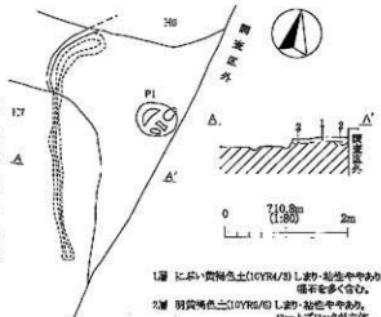
3.溝状遺構

(1) M1号溝状遺構

本址は調査区北端のイ-3Grで検出された。北東から南西に伸びる遺構と考えられる。検査状況は南北に2本の溝が並走するように検出されたが、調査区の限界でセクション観察を行った結果、調査区内の遺構確認が低かった為の結果であり、本米は1本の溝状遺構が底面で2段を有することが解った。検出範囲が狭い為、形状や規模は不明な部分が多いが、試掘調査の結果から幅は3m以上はあると考えられる。

本址からの出土遺物は図示できるものは無かったが、弥生後期簡清水式の壺や甕片、土師器内灰坏・須恵器灰片などがあった。これらの遺物の内、幾つかの物は角が摩耗したような形態であった。

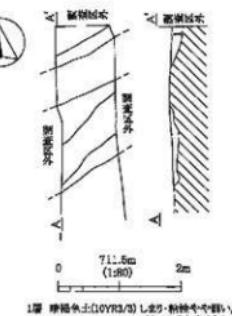
これら遺物の状態や、遺構縦二中に砂が多く含むことを考えると、本址の性格は流路か、或いは区画等を目的とした溝が流路に変化したことが考えられる。所産時期は覆土の状況より古代以降と推定される。



第14図 H8号住居址実測図



第15図 D1,2号土坑実測図



第16図 M1号溝状遺構実測図

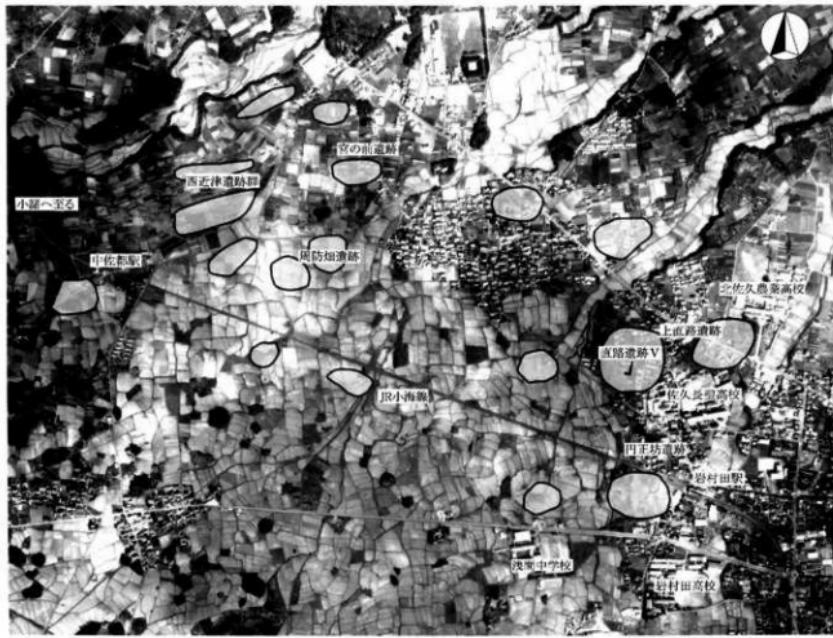
4. 調査の成果

今回の発掘調査は220m²という限られた範囲での調査であったが、枇杷坂遺跡群の内容把握としては大きな成果があった。

まず、第1点として台地の内部にまで弥生後期集落が広がっている事が確認された点である。第2図で示したように、周辺部の調査事例である上直路遺跡I・II・IIIや直路遺跡I～IVは台地の縁辺に近い部分の調査であった。今回の調査地点で住居址群が発見されたことにより、弥生後期集落は台地内部にまで広がっており、径約400mの範囲に広がることが予想できる。また、同一台地で南に200m離れた円正坊遺跡からは周溝墓群が確認されており、巨視的にみれば直路遺跡周辺の集落域と円正坊遺跡の墓域というように、弥生後期における土地利用形態も推定しうる可能性がでてきている。

次に、発見された住居址の所産時期が弥生後期前半と比定しうるものがあるということである。第1章でも触れたが、直路遺跡からは弥生中期栗林期から後期箱清水式への変遷を示す過渡的な土器群が出土していると述べた。その他の住居址は後期後半のものが多い。今回、台地内でこの時間的空白を埋める後期前半の住居が発見されたことは、この台地上に展開した弥生集落の継続期間も推測しうる資料が発見されたこととなる。

近年では超大型住居址の発見により西近津遺跡群が弥生後期における佐久平の中心的な集落と注目を集めている。しかし、上直路遺跡から出土した多量の銅鏡や今回の調査成果による集落域の空間的・時間的な広がりを考え合わせると枇杷坂遺跡群の評価も再考の時期にきており、今回の調査はそのきっかけとなる大きな意義があったと考える。以上、雑駁ではあるがまとめとしたい。



□ 弥生後期集落範囲

航空写真(昭和47年 1972 東洋航空事業株式会社)

図版1



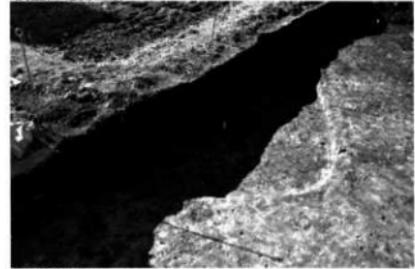
調査区北側全景



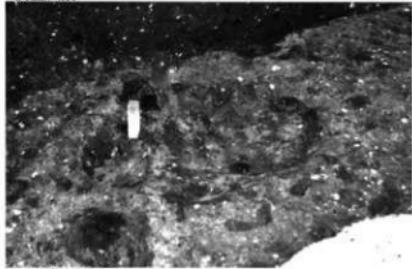
表土除去状況



調査風景



H1号住居址



H1号住居址壁

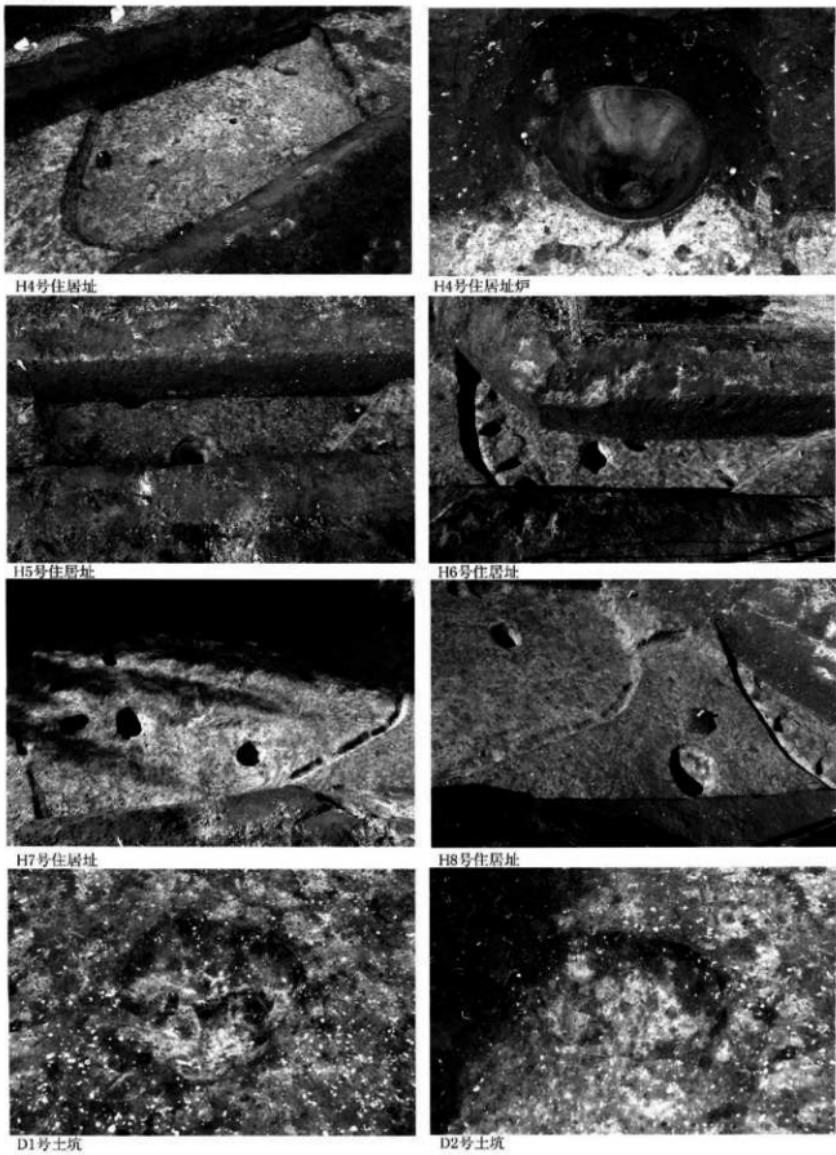


H2号住居址

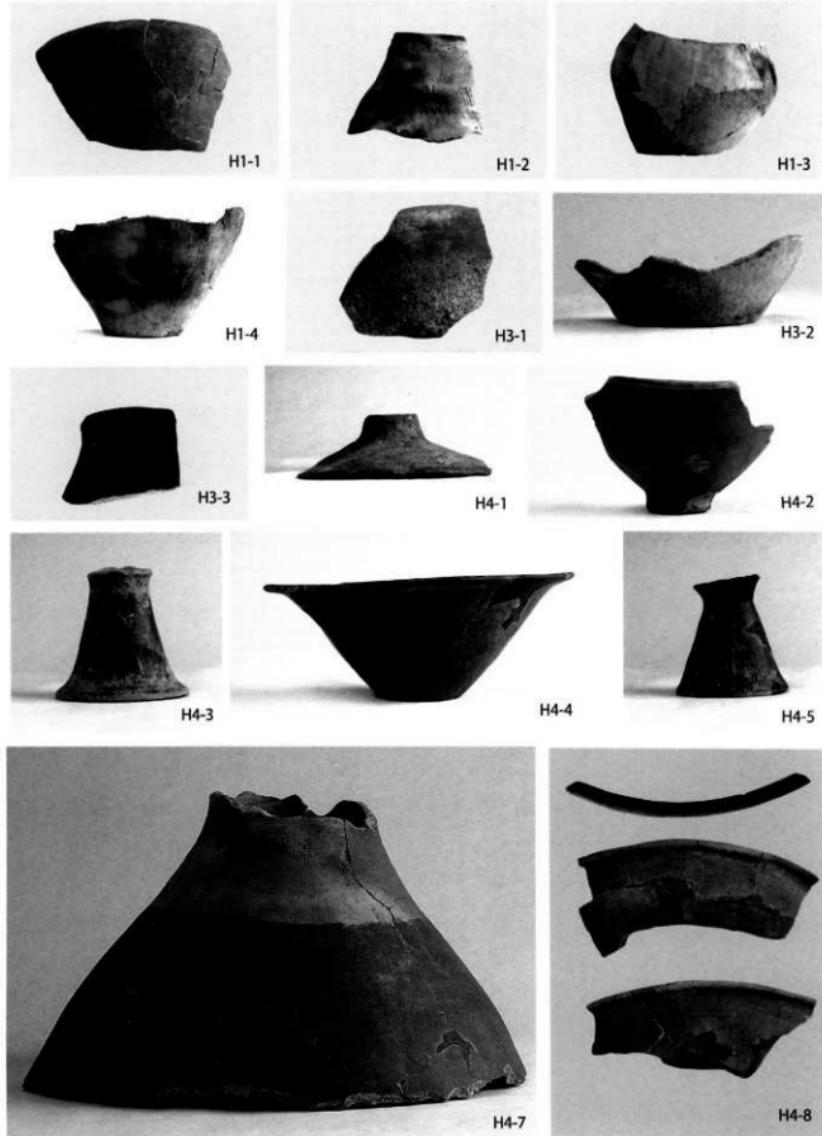


H3号住居址

図版2



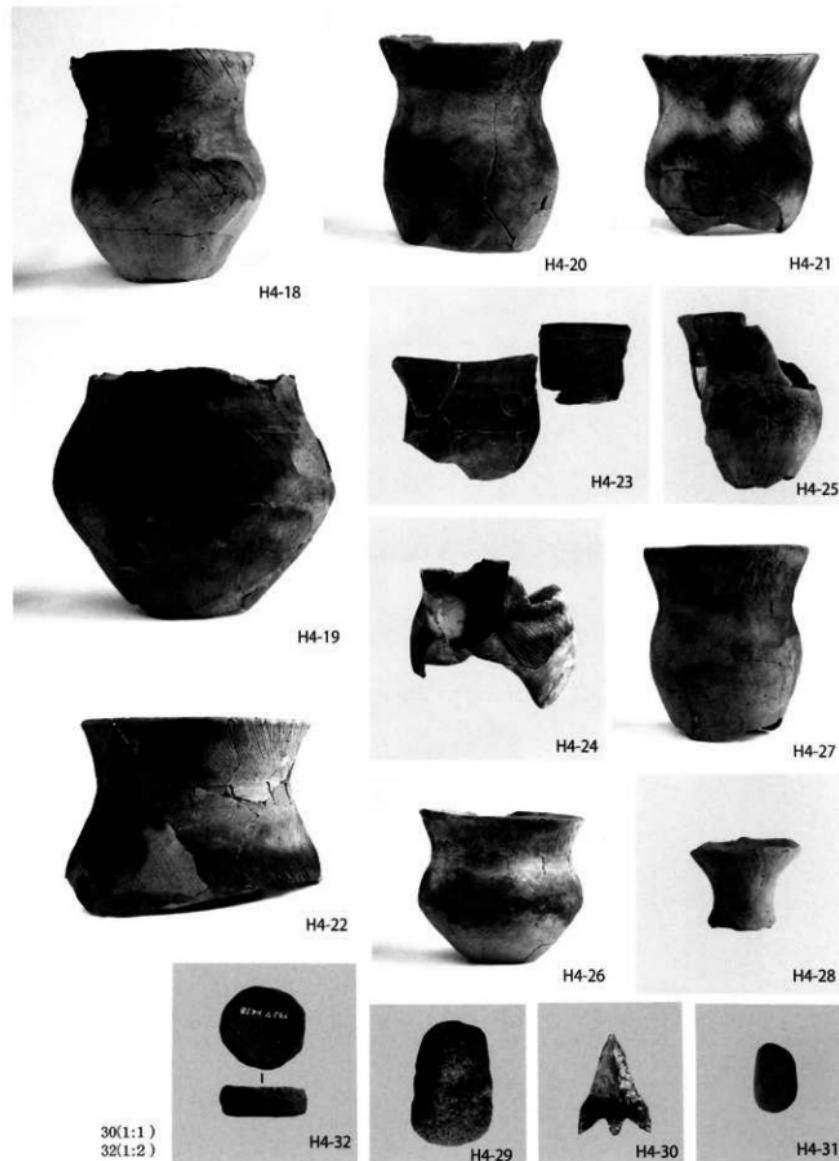
図版 3



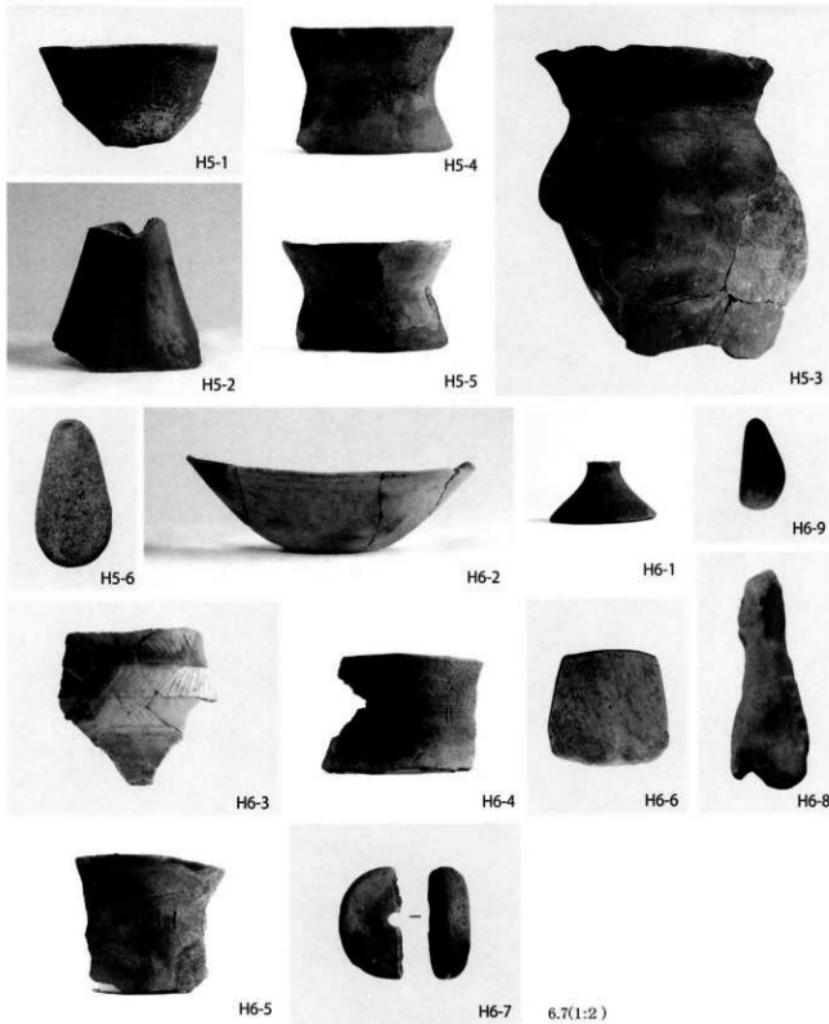
図版4



図版5



図版6



H1	種別	岩種	法 番			成形・調整・文様		指定地()残存地()丸底●	
			口径(Φ)	底径(Φ)	高さ(厚)	内 面	外 面	備 考	出土位置
1	弥生	高环	(22.6)	-	(7.8)	ミガキ→赤色磨影	ミガキ→赤色磨影	回転実測	I 区
2	弥生	環	(14.2)	-	(0.0)	ハケ目→切削	ハケ目→切削	回転実測	検出面
3	弥生	環	-	-	(10.0)	ミガキ	ハケ目→ミガキ 横挫波状文	回転実測	I 区
4	弥生	丸	(6.2)	(9.7)	ミガキ	ミガキ	ミガキ	回転実測	検出面
H3	種別	岩種	法 番			成形・調整・文様		指定地()残存地()丸底●	
			口径(Φ)	底径(Φ)	高さ(厚)	内 面	外 面	備 考	出土位置
1	弥生	高环	(28.2)	-	(8.7)	ミガキ→赤色磨影	ミガキ→赤色磨影	回転実測	検出面
2	弥生	環	-	(12.0)	(7.5)	剥落	ミガキ	回転実測	検出面
3	弥生	環	-	-	-	ハケ目→ミガキ	ハケ目→横挫波状文 横挫波状文	断山実測	
H4	種別	岩種	法 番			成形・調整・文様		指定地()残存地()丸底●	
			口径(Φ)	底径(Φ)	高さ(厚)	内 面	外 面	備 考	出土位置
1	弥生	環	(21.0)	-	5.5	ハケメ→ハナダ	ヘナダ→ヘミガキ	完全実測	II 区
2	弥生	高环	(28.0)	-	(12.0)	剥落→ミガキ→切削 切削→ミガキ	ミガキ→赤色磨影	完全実測	II 区
3	弥生	高环	-	-	(10.0)	ハケメ→ハナダ	ヘミガキ→赤影	完全実測	I・II 区
4	弥生	高环	(25.9)	-	(10.1)	ハケ目→赤鉄	ヘミガキ→赤影	完全実測	II 区
5	弥生	高环	-	9.5	(9.5)	ハケメ→ハナダ	ヘミガキ→赤影	完全実測	I 区・検出
6	弥生	環	-	-	(40.0)	ハケ目→ミガキ→剥落	横挫波状文→横挫波状文→ヘミガキ→赤影	完全実測	I・II 区
7	弥生	環	-	-	(24.7)	ハケメ→ヘミガキ→剥落	横挫波状文→横挫波状文→ヘミガキ→赤影	完全実測	伊
8	弥生	高环	(34.0)	-	(5.5)	ヘミガキ→赤影	口縁部横挫波状文→施正直→ヘミガキ→赤影	回転実測	I・II 区
9	弥生	環	(31.3)	-	(13.5)	ヘミガキ→赤影	横挫波状文→施正直→ヘミガキ→赤影	回転実測	II 区
10	弥生	環	(30.0)	-	(8.7)	ヘミガキ→赤影	口縁部 横挫波状文→ヘミガキ→赤影	回転実測	I 区
11	弥生	環	(31.8)	-	(13.0)	ヘミガキ→赤影	口縁部 横挫波状文→横挫波状文	回転実測	I 区
12	弥生	環	(25.2)	-	(6.2)	ヘミガキ	ヘミガキ	回転実測	II 区
13	弥生	環	(23.4)	-	(6.0)	ヘミガキ	ヘミガキ	回転実測	I 区
14	弥生	環	-	-	-	口縁部→ミガキ→赤影 施正直 ハケメ	施正直 赤影 開通表面き	断山実測	II 区
15	弥生	環	-	9.2	(8.4)	ミガキ→黑色處理	ヘミガキ	完全実測	I 区
16	弥生	環	-	(11.0)	(11.0)	ハケ目→ナーフ	ヘミガキ 底部→ヘミガキ	回転実測	II 区
17	弥生	環	-	-	(11.8)	(13.2)	ハケメ→ハナダ→赤影	ヘミガキ	完全実測 二次焼成 I・II 区
18	弥生	丸	(18.8)	-	(20.0)	ヘミガキ	横挫波状文X(本2止)→横挫波状文→ヘミガキ→赤影	回転実測	I・II 区
19	弥生	環	-	-	(20.0)	ハケメ→ヘミガキ	ヘミガキ→ヘミガキ	横挫波状文	完全実測
20	弥生	環	-	-	(16.6)	ヘミガキ	横挫波状文→ヘミガキ	完全実測	I・II 区
21	弥生	環	-	-	(14.0)	ハケメ→ヘミガキ	ヘミガキ→ヘミガキ	完全実測	I 区
22	弥生	環	-	-	(16.1)	ハケメ→ヘミガキ	ヘミガキ	完全実測	I 区
23	弥生	環	-	-	-	ヘミガキ	横挫波状文 横挫波状文 鋸齿模版文 円形浮文	断面実測	I・II 区 16
24	弥生	環	-	-	(14.2)	ヘミガキ	ヘミガキ	完全実測	I 区・検出
25	弥生	環	(14.2)	-	(14.0)	ハケメ→ヘミガキ	横挫波状文 横挫波状文(本2止)	回転実測	II 区
26	弥生	台付環	(13.4)	-	(12.5)	ヘミガキ	横挫波状文→横挫波状文(本1止)通合	完全実測	I 区
27	弥生	丸	(13.2)	-	(15.2)	ヘミガキ	横挫波状文→横挫波状文(本1止)通合	完全実測	II 区
28	弥生	台付環	-	-	(7.0)	ヘミガキ	ヘミガキ	完全実測	II 区
No.	種 別	材質	最大径	最大厚	重 量	所 見		出土位置	
						所 見		出土位置	
29	石	石	16.1	6.5	3.8	323.84	正面×2面 上下端部に施正直	検出	
30	石	黒曜石	2.1	1.5	0.25	0.51	複数	II 区	
31	石	石	0.6	3.3	2.2	84.67	正面・左側に磨り面	I 区	
32	ミニチャウ	土製品	-	2.9	(1.2)	内面 ハナダ 外面 ナデ	I 区		
H5	種別	岩種	法 番			成形・調整・文様		指定地()残存地()丸底●	
			口径(Φ)	底径(Φ)	高さ(厚)	内 面	外 面	備 考	出土位置
1	弥生	跡	(16.2)	(5.4)	8.8	ミガキ→赤色磨影	ミガキ→赤色磨影	完全実測	
2	弥生	高环	-	(14.0)	(11.0)	ハケ目	ミガキ→赤色磨影	完全実測	P1
3	弥生	環	(22.2)	-	(24.4)	ミガキ	横挫波状文→横挫波状文(本2止)14本	回転実測	H5
4	弥生	環	(12.8)	-	(9.7)	ミガキ	横挫波状文14本→横挫波状文	回転実測	P1
5	弥生	環	(14.0)	-	(8.5)	ミガキ	口縁部 横挫波状文 通合 横挫波状文(本2止)14本	回転実測	H5
No.	種 別	材質	最大径	最大厚	重 量	所 見		出土位置	
						所 見		出土位置	
6	赤・青石	石	11.9	6.1	3.9	433.25	正面に2面 上下端部と正面に敲打痕	I区	
H6	種別	岩種	法 番			成形・調整・文様		指定地()残存地()丸底●	
			口径(Φ)	底径(Φ)	高さ(厚)	内 面	外 面	備 考	出土位置
1	弥生	高环	-	9.0	4.50	ミガキ	ミガキ→赤色磨影	完全実測	
2	弥生	環	C4.0	-	7.3	ミガキ	ミガキ	回転実測	I 区
3	弥生	環	-	-	(13.1)	口縁部 ミガキ→赤色磨影	ハケ目→ミガキ ハケ目→赤色磨影	回転実測	H4 II 区 P2
4	弥生	環	(16.0)	-	(9.0)	ミガキ	施正直	回転実測	I 区
5	弥生	環	(14.2)	-	(11.0)	ミガキ	ハケ目 横挫波状文 通合 横挫波状文(本2止)14本	回転実測	I 区
No.	種 別	材質	最大径	最大厚	重 量	所 見		出土位置	
						所 見		出土位置	
6	土質土版	土製品	4.9	4.8	0.9	26.91	1/2面 ナデ 外面 赤色磨影 片面軋用	I 区	
7	砂純草	上製品	(4.0)	(4.0)	(1.5)	孔径(4.0) 外径(ナデ) 1/2面軋用	I 区		
8	磨石	石	18	6	3.4	683.41	下端部に敲打痕	I 区	
9	磨石	石	7.5	3.8	2.3	88.59	正面・左側にナリ凹	I 区	

報告書抄録

ふりがな	びわざかいいせきぐん すぐじいせきご							
書名	枇杷坂遺跡群 直路遺跡V							
副書名								
シリーズ名	佐久市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第234集							
編著者名	富沢 一明							
編集機関	佐久市教育委員会 文化財課							
所在地	長野県佐久市志賀5953 TEL0267-68-7321 FAX0267-68-7323							
発行年月日	平成27年(2015)3月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 (m ²)	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
びわざかいいせきぐん すぐじいせきご 枇杷坂遺跡群 直路遺跡V	さくしながとろ 佐久市長土呂 301-1他	20217	41	36°16.39'	138°28.12'	2014.12.01 ～ 2014.12.11	220	宅地造成
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
枇杷坂遺跡群 直路遺跡V	集落址	弥生	住居址8軒・ 土坑2基・ 溝状遺構1本	弥生土器(箱清水式) 石器・土製紡錘車				
要 約	台地上に展開する弥生時代後期集落の一部分を調査した。周辺の調査事例と同様に堅穴住居址の一部に地盤のズレによる影響がみられた。							

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第234集

枇杷坂遺跡群 直路遺跡V

平成27年(2015) 3月

編集・発行 佐久市教育委員会

〒385-8501 長野県佐久市中込3056

文化財課

〒385-0006 長野県佐久市志賀5953

Tel0267-68-7321

印刷所 キクハラインク有限会社